

『教育事典』一九六六年四月（小学館）

東南アジアの教育

とうなんあじあの
きょういく

〔歴史的背景〕 東南アジア地域は、第二次世界大戦前ほとんどがヨーロッパ諸国の植民地であった地域であるが、これら支配諸国は長い間を通じて、それぞれの地域の伝統文化を育てようとせず、むしろ破壊するという結果になった。このことが、教育に大きな影響を与えている。これらの地域の一般民衆は、長い間の植民地支配によって、西欧文化と自分たちの生活とは関係のないものだという考え方をもち、ある場合には劣等感にもなっている。すなわち、早くから西欧文化に触れながら、それとの交流により、しだいに向上するということでなくして、それに打ちひしがれ、無関心になるという状態を人の心の中に生み出した。経済的、政治的な面のみでなく、文化的な面でも全く自主性が失われていたのがその実情であった。

今日なお、一部に依然として古い伝統的生活に執着して、近代生活になじもうとしない考え方が強いのは、歴史的な時間の中で彼らがそのように教育されてきているからであって、それが社会の根底にあると、教育もまた何かにつけて強い影響を受けるのである。

り方が近代的な文化とかけ離れている点がある。いわゆる宗教改革を経ていないのである。これも植民地支配と深い関係がある。西欧の文化に接触しつつ、しかも隔絶しているという、一見矛盾した社会情勢の中で、宗教が独自の支配力を維持しつづけてきた。近代文化と関連をもたない宗教が強い力をもっているのである。

このことは、東南アジア諸国が近代教育を導入しようとするときに大きな障害になっている。宗教的習俗や信条が近代教育の基本的理念となるものを排撃することもある。この点をどうするかは今後の大きな問題となるであろう。

〔民族主義の問題〕 東南アジア諸国がタイを除いて第二次世界大戦後独立を獲得するには、いずれも、支配者に対して多かれ少なかれ、民族主義的な闘争を行ってきた。それは植民地時代を通じて長い間続けられたものの爆発ともみられる。

さらに独立後の国民的統一の維持には、民族主義の強いささえが必要である。これらの点は、また教育に大きい影響を与えている。かれらの導入する教育制度は、大体において西欧的な教育制度であるが、その教育内容となるものには、強い民族主義的思潮がある。これは往々にして、共産主義と結びつく可能性をもっている。それは共産主義が反資本主義、反帝国主義的闘争であるという

点と観念上の共通性をもつと考えられるからである。

〔発達の不均衡〕 東南アジアの教育の特色は、アンバランスという点にあるといつてよい。かつて植民地支配者は、それぞれの支配地域に西欧化した原住民を作って、これを手先として支配した。これらの指導者層は特権を与えられ、教育も高度なものを与えられた。それらの教育機関は十分に近代的な形態をもっている。

この少数の特権者の教育に対して、一般民衆の教育は著しくおかれている。女子は教育をうけないというごとき考え方がきわめて強いまま放置されている。また都市に対して農村は全く放置されている。これが義務教育の就学率が最近まで極めて低かった大きな理由である。

最近は各国とも義務教育に力をいれており、またユネスコのカラチ・プラン等によって、非常に勢いで躍進しつつあるが、同時に、それらの教育をささえている教育ビジネスの分野がまだなお未発達である。また教員の養成もまにあわない状況にある。したがって、教育の上での就学率の向上は必ずしも教育の充実を意味しない。

もう一つ大きな課題は、技術教育の充実であるが、ここにも多くの隘路がある。↓国際教育計画

（矢口 新）